

特集

# 世界とつながる 長崎大学の 卒業生



KITAYAMA Syun



MIYOSHI Yasuhiro



NAKAZAKI Kenji



YANAI Tomoko



MURAOKA Wataru



NAKANISHI Takashi

長崎大学には、短期・長期の語学留学や  
日本と海外の2つの大学の学位を取得できるダブル・ディグリー・プログラムなど、  
様々な形態の留学プログラムがあり、過去5年間で日本人学生の留学経験者数が70%もアップしています。

そのような環境も影響して、卒業生の中には、  
日本と世界をつなぐ懸け橋となって奮闘しているOB、OGが少なくありません。

そこで今回の特集では、世界と接点を持って活躍する卒業生に注目。

それぞれが歩んできた道のりと今後の展望、  
そして大学で得た学びがどのような形で今に生かされているのかじっくり伺いました。

卒業後は先輩たちのように世界へ羽ばたきたい！  
そんな夢が広がる、貴重なエピソードが盛りだくさんです。

Graduates of  
Nagasaki University  
Connected to  
the World



世界と  
つながる  
長崎大学の  
卒業生

Graduates of  
Nagasaki University  
Connected to  
the World

# 上質なエビを求めて 世界のライバルと競い合う

株式会社ノースイ 東京支店 海老営業部 主任  
**北山 峻さん** KITAYAMA Syun



## Profile

きたやましゅん  
大阪府枚方市出身。28歳。2013年  
に長崎大学水産学部を卒業後、株  
式会社ノースイ入社。凍魚営業部、  
加工水産営業部など4部署がある  
中、海老営業部に配属となり、入社  
後3カ月でインドへ。現在もインドを  
はじめとするアジア各国やカナダを  
中心に、エビの買い付け業務に携わ  
っている。カナダ出張の際には釣り  
ざおを持参。休日に魚釣りを楽しん  
でいる。

右も左も分らない  
入社後すぐに渡ったインド

水産学部を卒業後、農水産物を原  
材料とした冷凍食品を取り扱うノー  
スイに就職した北山峻さん。入社時  
から在籍している海老営業部は、文  
字どおりエビを専門とする、業界で  
も珍しい部署。アジアやカナダと  
いった海外の生産地へ定期的な足を  
運び、買い付けなどの業務に携わっ  
て七年目になります。

「入社早々、バスボートを持ってい  
るか聞かれ、一カ月間のインド出張  
に行きました。インドは、養殖エビ  
の生産量が中国に次いで世界二位の  
国ですが、宗教上の理由で自国では  
ほとんど消費しません。生産量と輸  
出量のバランスが良いため、現地の  
工場で養殖のパナメイエビを天ぷら

競合が多く価格相場の変動が激し  
い水産業界。北山さんは入社一年目  
から、一千万円分の買い付けを任せ  
られたそうです。

「エビにはたくさん種類とサイズ  
があり、買い付ける際にはそれぞれ  
の相場を追いかけて見極める必要が  
ありますが、そのための方法は自分  
で学ぶしかありませんでした。最初  
はよく分からないまま築地に行き、  
仲買や荷受けと呼ばれる大卸さんの  
ところに行つて聞き取りをしながら  
相場を捉えることから始めました。  
数字を見誤ると大きな損につながり  
ます。まさに経験が物を言う業界で  
あり、プロフェッショナルとして成  
長できる分野でもあります」。



諸外国より優位に立つ  
ポイントは信頼関係にあり

昨年からオマールエビの担当にな  
り、カナダへ赴くようになった北山  
さん。そこで直面したのは、大学の  
講義でも学んだという資源管理の問  
題でした。

「全世界のオマ  
ールエビの九十パー  
セントはカナダと  
アメリカの東海岸  
で水揚げされてお  
り、各政府が漁の  
時期や漁獲量を厳  
しく制限していま  
す。オマールエビ  
はもともとアメリ  
カが一番の消費国  
ですが、中国やベ  
トナムなどの消費  
が増えてきたた

カナダのプリンス・エドワード島の右下にあるジョージタウンの港。漁を終えたボートが鰻に入っているオマールエビを陸に揚げている様子。

め、交渉は年々厳しくなってきた  
る状況です。特に商品に対して高い  
品質を求める日本は、他国より優位  
に立ちにくい。アジア各国のエビの  
生産地でも状況は同じで、他国に向  
き始めた目をこちらに向け直しても  
らうために、値段は抑えて品質を求  
めるという方法ではなく、少々高く  
ても、良いものをきちんとした対価  
で買い取る交渉をしています。実  
際、日本向けの商品を出荷すること  
はステイタスにもなります。現地に  
とつてのメリットを考慮した上で交渉

用に加工して輸入する新規事業を立  
ち上げることになり、僕にも声が掛  
かりました。大学生の頃からいずれ  
は海外で仕事をしてみたいと思っ  
ていましたし、プロジェクトに加えて  
もらえてありがたかったです」。

現地ではどのような業務を担当し  
ましたか。

「工員の皆さんに、加工工程につ  
いて指導する役目を任せられました。現  
地では、例えば工員の皆さんが石鹸  
で手を洗うことを嫌ったり、時間を  
守る意識が低かったり、日本との文  
化の違いに驚きました。作業自体も  
最初の一年はスピードが遅く、すぐ  
に成果は出ませんでした。二年目  
ごろから軌道に乗り始め、今では年  
間四億から五億の輸入額を誇る弊社  
の基幹事業にまで成長しました。初  
めて携わったプロジェクトが成功し  
たことはうれしかったですね」。



ベトナム南部のパナメイ  
エビを養殖している池。

## 魚釣りが 大好きだった 少年時代

子どもの頃から魚釣りが  
大好きで、水産学部への進  
学を目指した理由も水産関  
係の仕事に就きたかったか  
ら。学部には同じように魚  
好きな仲間が多く、講義も  
興味深いものばかりです。  
微生物研究室では、自分  
で釣り上げた魚の内臓から  
微生物を取り出して研究材  
料に。残った魚の本体は、さ  
ばいて食べていました。釣り  
サークルに入るなど、魚づく  
しの4年間でした。好きな  
ことを追求する。それが現  
在につながっているように  
思います。

世界とつながる

長崎大学の卒業生

Graduates of Nagasaki University Connected to the World

# 人としての懐の深さが異国で道を切り開く鍵

株式会社GSユアサ 自動車電池事業部 村岡 陽さん MURAOKA Yataru

トルコ



Profile

むらおかわたる 1979年兵庫県丹波市出身。40歳。2008年に長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科を修了後、研究者を企業に派遣する株式会社ハイテックに入社。派遣先の株式会社GSユアサの研究開発・技術サービス部門で経験を重ね、2013年にGSユアサに正式採用される。東京の営業所での4年間の勤務を経て、2017年からトルコに赴任。妻と子ども2人と一緒に移り住んでいる。

## 相手の文化を尊重したコミュニケーション

約百年にわたって二次電池（バッテリー）の開発・製造・販売事業に取り組んできたGSユアサ。自動車電池事業部に所属している村岡陽さんは、トルコの合弁企業に向向しています。ヨーロッパなどにユアサブランドの商品を展開する事業の統括を担当しており、開発から製造、販売までプロジェクト全体に携わっています。

「私が担当している自動車用電池においては、ハイブリッドカーの普及などにより活躍の幅が広がっています。そうした中で以前から商品展開を行っているアジアだけではなく、今後はヨーロッパをはじめアメリカ・中近東の販路を拡大していくから親睦を深めています」。

異なる文化の人ともすぐにコミュニケーションを図れましたか。

「高校時代に一年間アメリカに留学していたのですが、そこは日本人が自分しかいないような田舎町で、文化の違いから当時とても寂しい思いをしたんです。そうした経験から自分も留学生の力になりたいと思っていました。長崎大学には、留学生の大学生活をサポートするチューター制度があり、学部時代にその制度を活用して講義で分からない部分をフォローしたり、課題を一緒に取り



前列中央に立つ村岡さん。トルコの合弁企業との展示会に出席し、現地スタッフとユアサの商品のPRを行いました。

組んだり、時には一緒にアルバイトをすることもありました。そうして留学生と交流を深めた経験から、コミュニケーションの苦手意識は特にありませんでした」。

## 自分にできることを探し実績を積み重ねていく

長崎大学では環境科学部の環境保全設計コースに進み、大学院博士課程まで修了したそうです。

「はい。小さい頃から関心があった水質浄化に関する研究に取り組みました。最初は物理的なフィルターを用いた水質浄化を研究していたのですが、途中から微生物による分解を活用した水質浄化にアプローチを変えました。所属ゼミとは異なる専門外の分野の先生方にも話を聞きに行ったのですが、快く応じてくれて。文理分けにとらわれず、テーマに対するアプローチは自ら考える。そんな環境科学部の自由な気風が自

## 仕事で役立っている大学時代に身につけた能力

トルコで自動車用電池のプロジェクト全体に携わるにあたり、営業的な視点と技術的な視点のどちらも必要とされています。多角的に物事を捉える能力も必要で、実はそうした力は大学時代に養われたと思っています。当時一番印象に残っている講義は、水質浄化とはまったく異なる専門外の哲学や文化人類学でした。これまでにない考え方を示され、世の中にはこんな考え方もあるのかと衝撃を受けたんです。それで毎回、最前列でかじりつくように受講していました。大学時代は、こうした一般教養としての視野を広げる機会に恵まれていたと思います。海外では、日本では考えられないような突拍子もないことも起こります。そうした時に広い視野で物事を捉えるためにも、懐を広げておく必要があるのではないのでしょうか。

分には合っていたと思います」。

もともと技術開発や研究職を志望していたのですが、現在の仕事にギャップは感じませんか。

「社会に出ると、自分の専門性をそのまま仕事に生かせるとは限りません。それでもすぐに諦めるのではなく、必ずできることがあるはずだと考えて道を切り開くことが大事だと思います。私自身、国際的に活躍したい気持ちもあったので、入社当時

から海外駐在を希望し続け、必要な能力を磨いてきました。チャンスだと感じていたのは、自分の業務外の仕事を指示されたときです。駐在員は日々多くの課題に向き合う必要があります。専門外の仕事でも臆せず取り組む姿勢が対応力を鍛えることにつながります。そうやって見通しを立てて努力したことで、トルコ赴任を獲得することができたのだと思います。

もちろん、駐在はゴールというわけではなく、キャリアプランの中における一つのマイルストーンです。現在も自分に足りない部分に直面する毎日ですが、確実に経験を積み重ねることができています」。

世界とつながる

長崎大学の卒業生

Graduates of Nagasaki University Connected to the World

# 諦めずに情熱を持ち続けて 自分だけの役割を見つけて

G.F.Handel Music Academy ヴァン講師

柳井知子さん YANAI Tomoko

ドイツ



Profile

やないともこ  
山口県防府市出身。2002年に長崎  
大学大学院教育学研究科を修了。そ  
の後、海星中学・高等学校で音楽の  
教員を務めながら、2005年に行われ  
たイタリアのザイラー国際ピアノコン  
クールに出場し2位受賞。福岡市のイ  
ンターナショナルスクールでのピアノ  
講師を経て、2018年からドイツの  
G.F.Handel Music Academyで勤務。

自分の進みたい方へ向かって  
手を抜かず全力で取り組む

快活な語り口が印象的な柳井知子さんは、長崎大学大学院教育学研究科を修了後、現在はドイツ・デュッセルドルフ在住。ヘンデルミュージックアカデミーのケルン校とデュースブルク校で、教鞭を執っています。

「通っている生徒たちは三歳から十八歳までで、現在は三十八名の生徒を担当しています。授業中の言語は基本的に英語ですが、生徒の国籍はドイツ、イギリス、アメリカ、インド、中国など多種多様です」。

レッスンの中で心掛けていることはありますか。

「音楽的に優れた楽曲には、普遍的な価値や温度、色彩、感情などが感  
「通っている生徒たちは三歳から十八歳までで、現在は三十八名の生徒を担当しています。授業中の言語は基本的に英語ですが、生徒の国籍はドイツ、イギリス、アメリカ、インド、中国など多種多様です」。



「私みたいに他の人よりタイミングが遅くても、情熱を失わずに続けていけばきっと何かがある」と話す柳井さん。限界を決めずに挑戦し続ける気持ちを大切にしています。

じられます。子どもの感受性は鋭いので、作品の選び方や教え方でうまく引き出してあげたいと考えています。そのためにはまず、こちらが手を抜かず徹底的に教える情熱が必要です。だから私のレッスン内容は厳しいと自分でも思いますけど、子どもたちはいつも倍以上で返してくれるんですよ」。

長崎大学を卒業後は海星中学・高等学校で音楽の教員をしていたそうですが、その時期に並行して国際ピアノコンクールに出場したそうですね。

「はい。充実した環境で教員を続けながらも、常に演奏への情熱を持ち続けていて。ある時イタリアでコンクールが開催されることを知って、当時私は年齢制限ギリギリの二十七歳でしたが、最後のチャンスだと思っただけで出場し、二位という結果を残すことができました。教員の仕事と

したいと考える学生にアドバイスはありますか。

「一つの強みで勝負するためには、限られた一流にならなければいけません。しかし頭を柔らかくして、興味のある分野を何かと組み合わせることで、自分にしかできない役割が見つかります。私にとってそれは音楽と、教育分野の研究と、英語でした。組み合わせは学生時代から考えられると思いますし、きっとあなたの役割を必要としている人がいます。その場所が私みたいに日本以外であれば、新しい言語の習得も必要かもしれないですが、やりたいことを見失わなければ情熱を持って頑張ることができると思います」。

やりたいことや活躍したい場所があれば、何かをするのに遅いと感じる必要はないと思います」。

## 前向きに取り組んだ経験が 独自の音楽人生につながる

学生時代の経験で、今の仕事につながっていることはありますか。

「ヨーロッパの音楽学校の講師の多くは演奏家になるための専門教育を受けており、皆さん素晴らしい音楽家です。しかしピアノをうまく教えるための訓練を受けている人は少なく、私は長崎大学の教育学部で、音楽だけではなく幅広い分野の知識を得ることができました。ピアノ教授法や音楽史などはもちろん、教育心理学や発達心理学、一般教養の政治学や社会学なども学んでいたことで、生徒一人一人の実態を的確に把握した上で、音楽作品を愛好し芸術的に演奏できるような成長を促す指

## 何でも飛び込んでみる 積極性を学んだゼミ活動

学生時代の思い出としては少人数でのゼミ活動が印象的で、現在は退官されている堀内伊吹先生には本当にお世話になりました。教育学部での学習内容と同様、音楽に限らずさまざまな分野に挑戦するチャンスを与えてくださったことを覚えています。自分の進路や人生計画についても、いつも明るく後押しをしてくださいました。また堀内先生自身、お忙しい中でもとにかくフットワークが軽く、様々な分野で幅広く活躍されている方でした。そうしたバイタリティー溢れる姿勢がとても印象的で、積極的にやりたいことに挑戦する今の自分らしさのルーツになっていると感じます。また堀内先生は地域の音楽文化を向上させるためにも積極的に活動されていたことを覚えていて、私もドイツに来て2年目ですが、いつか現地の音楽文化の振興に貢献できたらと思います。

国も文化も異なる子どもたち一人一人に合わせて指導方法を工夫する柳井さん。また子どもだけでなく、保護者とのコミュニケーションも重視。「メールや電話、手紙など、連絡方法も相手によって使い分けています」。

世界と  
つながる

長崎大学の  
卒業生

Graduates of  
Nagasaki University  
Connected to  
the World

# サイエンスという共通語で ネットワークを築く

to the World



## Profile

なかにしたかし  
長崎県長与町出身。45歳。2000年  
長崎大学大学院海洋生産科学研究  
科、博士(工学)取得。日本学術振興  
会特別研究員としてアメリカ・ヒュー  
ストン大学、イギリス・オックスフォ  
ード大学を経て、2004年より物質・材  
料研究機構に勤務。ドイツ・マックス  
プランク研究所の客員グループリー  
ダーなどを経て、2016年より現職。ポ  
ーランド・ワルシャワ工科大学の客員  
教授等を歴任。現在は、北海道大学と  
中国・深川大学にも客員教授として在  
籍。専門は機能性分子材料の開拓。

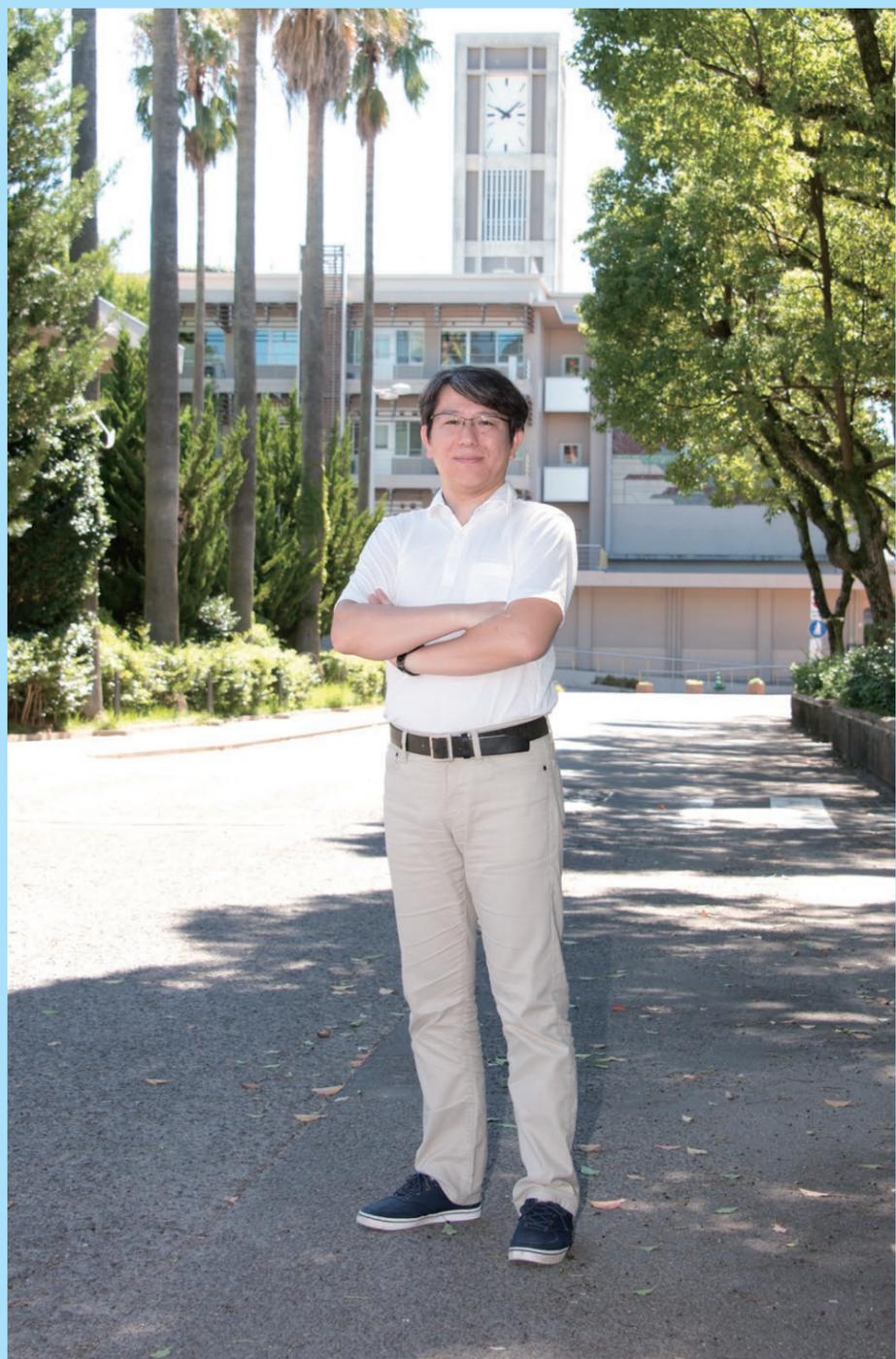
国立研究開発法人 物質・材料研究機構

中西尚志さん NAKANISHI Takashi

## 自分が作った新素材が AIや医療に生かされる

身の回りに存在する物の構成成分を  
ほとんど細かくしていくとたどり着く  
「分子」。この分子レベルで新しい素  
材を研究する研究者、中西尚志さん  
は、長崎大学工学部の卒業生です。中  
西さんが所属しているのは、つくば市  
にある国立研究開発法人 物質・材料  
研究機構(NIMS)の国際ナノア  
キテクトニクス研究拠点。

「言ってみれば、材料に関する総合研  
究所ですね。国立研究所ですから、国  
からドンとミッションが下りてきま  
す。最近ならばデータサイエンスで、  
データをため込んでAIで処理し、高  
性能新素材の開発に役立っています。これ  
には企業も注目しており、基盤技術つ  
くり協力して取り組んでいます。ま



日、関連書籍も上梓しました」。

研究所でのグループには外国人も数  
人おり、ミーティングは常に英語で進  
められます。中西さん自身、大学院修  
了後はアメリカで一年半、イギリスで  
一年の研究員生活を送ったそうです。

た、私自身もフロンティア分子グルー  
プのリーダーとして、自分で設計して  
新しい機能を持つ分子の材料を作って  
います。今手掛けているのが、新種の  
液体材料です。液体は固体に比べると、  
どんな形にも変形できて、力を加  
えても壊れることなく、材料として  
使い勝手がいいんです。既存の例でい  
えば、特殊な光を当てると光るインク  
は、紙幣などのセキュリティ印刷に使  
えますね。同様に、特徴がある液体を  
作れば、医療機器に応用して脈拍や心  
拍を電気シグナルとして検知するな  
ど、素材の可能性が広がります。今  
は、この液体の特性を深く知るための  
実験や研究に取り組んでいます」。

自分で作った物質には、ご自身の名  
前を付けるんですか。

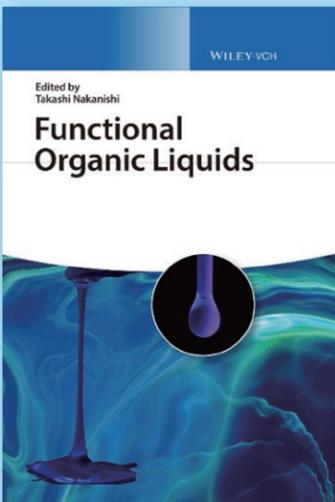
「いや、さすがにそれは(笑)。「機能  
性分子液体(Functional Molecular  
Liquid:FML)」と呼んでいます。先

クが築きました。まさに財産です」。

## 「あれ？」を見逃さない アーカイブの多さが鍵

この世界に進んだのはなぜでしょう。  
「大学入学時はこだわりもなく、自  
分は物理より化学だな、と。素材作り  
に惹かれて四年生で分子システム学研  
究室に入ってから、がぜん面白くなっ  
てきました。研究室の先生や先輩が大  
変熱心で、ワイワイ言いながらポリ  
マーや機能性材料の研究に夢中でのめ  
り込みました」。

「君は早く海外に出た方がいい。その  
ために、二年で博士の学位を取って、  
一年間は海外に出なさい」と当時の村  
上裕人先生(現・准教授)に背中を押  
されたことも大きかったといいます。  
師事していた中嶋直敏先生のネット



自身で開発した新機能液体に関する書籍  
『Functional Organic Liquids』。(発行:  
ドイツ・WILEY社)

## 後輩に伝えたい一言

グループメンバーにも常  
に言っているのですが「研究をとにかく楽しんで」。楽  
しまないと続きません。若い頃、あるプロジェクトで  
出会った先生から「ホームランを狙ってフルスイング  
しなさい」と言われました。三振でもいい。振り幅が大  
きければ視野も広がります。スポーツと同じで、イン  
ターハイに出られなくてもチャレンジしたという事実  
が、自分の自信やポテンシャルにつながります。

ワークで、海外の研究者に出会うこと  
ができ、渡英の足掛かりにもなりまし  
た。  
「海外との接点をつくってくれたこと  
は非常に感謝しています。当時、助手  
や助教だった先生方も、今や准教授  
や教授として活躍です。私にとって  
はホームグラウンドのようなうれしい  
懐かしさがありますね」。  
最後に、研究者として成功するコツ  
はありますか。  
「そうですね。実験や研究の過程で  
『あれ?』と思った時、いかに見逃さ  
ないか。失敗をただの失敗として流す  
より、立ち止まってよく考えてみる。  
それで分からなかったら、とりあえず  
頭のアーカイブ(引き出し)に入れて  
おく。その場で理解できなくても、後  
でひらめくことがあります。アーカイ  
ブの数の多さが、発見や発明を呼び寄  
せます」。

茨城県つくば市にある物質・材料研究機構。  
(提供:物質・材料研究機構)

# 観光産業の発展を目指して この街の魅力を発信する

to the World



## Profile

なかざきけんじ  
長崎県長崎市出身。57歳。1985年に長崎大学経済学部を卒業後、長崎県庁に入庁。2011年から4年間アジア・国際政策課長を務め、2016年対馬振興局長に就任。2018年より現職。国内外からの誘客に加え、宿泊施設の品質向上や観光人材の育成に取り組むなど、観光産業の活性化に向けて尽力している。大学時代は漫画研究会に所属。毎年、手描きのイラストを添えた年賀状を送っている。

長崎県文化観光国際部 部長  
中崎謙司さん NAKAZAKI Kenji

## 高いポテンシャルを 観光産業に生かす取り組み

文化、国際、観光などの分野を所管する長崎県文化観光国際部は、長崎県の魅力を最大限に結集して発信し、国内外から多くの人々を呼び込み、活性化につなげようとする部署です。その統括を担っているのが、経済学部出身の中崎謙司さん。海外との接点は多岐にわたりますが、いつ頃から国際関係の業務に携わってきたのでしょうか。

「二〇一一年に、本県の国際戦略を推進するアジア・国際政策課で、初めて課長になりました。海外の業務に関わったのはこの時が初めてです。それまで海外出張の経験はほとんどなく、語学力もありませんでしたが、もともと人と話すことが好き

です。さかのぼれば、上海在住の欧米人が船で長崎を訪れ、雲仙で避暑を楽しんでいた時代がありました。本県には他県にはない歴史的、地理的な強みがあります。文化、自然環境、食といった高いポテンシャルを観光産業の発展につなげなければと強く感じています」。

対馬振興局長時代には、釜山との交流も経験されたそうですね。「はい。対馬赴任中に、対馬が交流の橋渡しをした朝鮮通信使の記録が、ユネスコ『世界の記憶』として登録されました。釜山の朝鮮通信使祭りには、対馬藩主役で参加しました。韓国からの観光客が増えてきた時期でもあります。私自身、対馬は



長崎港を見渡す長崎県庁の屋上にて。

若い頃を過ごした思い出の地ですが、当時と比べて今の人口はその半分以下です。観光客の増加は、島が生き残るために欠かせない要素ですが、国家間の問題が絡んでくることが多々あります。私たちの力では解決が難しい問題が発生した時は大変ですが、地道な地域間交流が関係改善に寄与すると思っています」。

在の仕事に同窓の仲間との結び付きがとても生きています。お互いの思いを学生時代の感覚でざっくりばらんに話すことができ、地域経済の活性化について考える一つの切り口になっています」。

## 大学時代の仲間の絆が 目標を後押ししてくれる

大学時代の学びが、実際に役立つていると感じますか。

「学びとは少し異なるかもしれませんが、経済学部には『瓊林会』という同窓会組織があり、卒業生同士の絆が固い学部です。大学生だった頃は組織について意識することはありませんでしたが、実際に観光事業者や企業の皆さんと向き合う中で、現

## 進路選択の決め手は 長崎特有の雰囲気

対馬、山口県を経て、高校卒業後に長崎市内に移住。長崎で1年間の浪人生活を過ごしたことで、地域が持つ魅力や人の温かさを実感しました。地元大学の経済学部を志望し、県庁マンになると思ったのも、自然な流れだったと思います。経済学部では経済原論のゼミを選択。ゼミでの学びが仕事に直結する訳ではありませんが、地域経済について考え始めるきっかけになったことは確かですし、当時受けた公務員試験にも役立ったようにも思います。

長崎大学では、経済学部のように各学部で同窓会を組織しており、OB・OGとのネットワークが、卒業後の進路などに生きてくることがあります。最後に、今後の課題や展望を教えてください。

「昨年、県内で二つ目の世界文化遺産として、

ですし、コミュニケーションを図りながら仕事をするタイプなので、性に合っている分野なのかもしれませんね。でもやはり、高校生や大学生の皆さんは、将来どのような職種に就くにしても、語学、特に英語は習得しておくべきだと思います」。

四年間のアジア・国際政策課長での業務で思い出深いものはありますか。

「海外には四十回以上行っただけ、たくさんあります。特に、県のバックアップで二〇一二年に運航された民間企業による長崎・上海航路は、日中関係の悪化により翌年三月に運休しましたが、この時に長崎港国際ターミナル建設や、「CIQ（税関、出入国管理、検疫）」の拡充など、ハードとソフトの両面で整備が進んだことが、現在のクルーズ船の受け入れ態勢につながっていると思います



2018年6月に中東パレーンで、潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録を決定した世界遺産委員会に参加。前列には、瓊林会の大先輩でもある中村知事。



2016年5月、対馬振興局長時代に釜山で行われた朝鮮通信使祭りで、朝鮮通信使一行を先導する対馬藩の藩主役を務めた時の様子。